

# レソト山岳地における複合的生業の生成過程

平成 17 年入学  
派遣先国：レソト王国  
長倉 美予

キーワード：レソト，山岳地，農耕，牧畜，出稼ぎ

## 対象とする問題の概要

レソト王国は南部アフリカに位置し，南アフリカ共和国に周囲を囲まれる面積 3 万 km<sup>2</sup> 程の小さな山岳国である。生業は主に農耕，牧畜，出稼ぎ労働の 3 つが複合的に実践されている。農耕では主食のトウモロコシなどの栽培が主にされ，牧畜ではヒツジなどを飼養し，定期的に毛刈りをして現金収入を得ている。また牛耕を行なうため，ウシの飼養も重要である。出稼ぎ労働は，1800 年代に南アフリカで金鉱山が発見されて依頼，現金収入の手段として一般的に実践されてきた。初めは早魃など緊急時の手段であったが徐々にその重要性は増し，1930 年代には南アフリカの“Labour Reserve”とまで呼ばれるようになった。その結果，出稼ぎ労働の社会的影響についてこれまで多くの研究者が取り組んできた。例えば家に残された妻の立場の弱体化，農作業における男性の労働力不足，そして出稼ぎ労働者が持ち帰る病気の蔓延などが挙げられる。

## 研究目的

レソトの国土は大きく分けて西部の“低地”（標高約 1400～2500m）と東部の“山地”（標高 2500～約 3000m）に分けられる。山地では耕作可能な土地面積が低地に比べて少なく，逆に放牧地が広域なこともあり，低地と山地の生業の複合形態は異なる特徴を持っている。しかし前述した先行研究では，レソト社会全体を扱っていながら低地に焦点をあてたものが多く，山地について詳細に考察した研究が少ないのが現状である。1970 年代以降は山地でも低地同様に「出稼ぎ労働が重要な現金収入源のひとつとなってきたが，低地に比べて浸透した時期が 40 年程遅く，従って低地とは異なる複合的生業の形成過程をたどってきたのである。本研究では，そうしたレソト山岳地における複合的生業がどのように形作られてきたのかを明らかにすることが目的である。

## フィールドワークから得られた知見について

首都マセルでは数日間にわたって複数の研究者と情報交換を行なった。これによりレソト山岳地の詳細な歴史や，山岳地における先行研究などの情報を得ることができた。その後，山岳地域のモホトロング県に位置する調査村に移動し，インタビュー調査を実施した。インタビュー内容は，栽培作物と家畜泥棒に関する質問，そして成人男性からはこれまでの職業についてのライフヒストリーを聞き取った。

調査の結果，これまで主食用の作物（トウモロコシ）のみを栽培していた耕作地に，今年度から新たに商品作物（キャベツなど）を栽培し始めた世帯が複数あった。そのうちの 1 人は“十分な収穫が得られないから，何か新しい試みをしたかった”とその理由を語った。また家畜数を聞き取った結果，1950

年代以前は多くの人が数十頭の家畜を所有していたが、現在は数頭もしくは全く所有しない人が大半を占めていた。その理由は家畜を盗まれたからとする人が多かったが、実際、家畜泥棒にあった年を聞き取ると、1990年以降その数が増加していた。またライフヒストリーに関する質問からは、調査村では1950年代以降南アフリカの金鉱山への出稼ぎ者数が増加し、1970～80年代には非常に多くの若い男性が出稼ぎに従事していたことが明らかになった。その間、農作業は出稼ぎ者の父親が代わりに努めていたため、深刻な労働力不足にはならなかったと思われる。出稼ぎによる現金収入は食料や衣服を購入する以外にも、作物の種や家畜の購入など、農業への投資にも利用されていた。

### 今後の展開・反省点

今後は出稼ぎ労働が農耕と牧畜のシステムへどのような影響を及ぼしてきたのかを考察し、調査村の複合的生業が生成された過程を明らかにしていく。

今回の調査では村における出稼ぎ労働がどのように推移してきたのかを明らかにすることができたが、1990年代に入ると低地同様、出稼ぎ者の人口が減少した。調査村における出稼ぎ労働の最盛期が30年程度と、1世代の期間しか続かなかったということも、社会的影響を考える上で重要であろう。



写真左：出稼ぎ先から帰省した夫から、土産のブーツをもらう

写真右：見張り小屋と牧童たち